・漣洏としてまた嗚咽す
・縦ひ　扶持することを得ずとも
・其れ、凋むに後るる節を奈せん

通釈

・私が晴天の霹靂のように左遷の命を受けてから
・（宣風坊の家の庭に植えてあった）竹とも遠く離れてしまった。
・鎮西のこの左遷された土地と我が京都の家の東籬とは
・（はるかに幾重の関所、山々に隔てられて）家からの消息も絶えてしまった。
・ただ単に地理的・物理的に隔絶させられているだけでなく、
・（精神的にも）天候の酷烈な寒気に遭遇し、
・憂えもだえる日々が続き、夜は少しも心して休むことが出来ない。
・しんしんと、夜の間中、雪が降り積もり、
・（朝になり）近くの家々が雪で白くうずまっているのを目にすると
・はるか彼方の京都の我が家の竹もこの雪の重みで折れていることだろうと心配になってくる。
・（主人もいなくなって、家を守ってくれるはずの）家僕も、とっくに逃げ散っているに違いない。（竹の管理なども誰もかえりみるものはいないであろう。）
・いったい、この寒い中をおして誰が竹に降り積もった雪を掃き捨ててくれているだろうか。